

一組 四場面

作者は、えびフライを大事に思う主人公を描くために喜作を登場させた。そして、さらに確実にするために、喜作を一つ上で主人公があまりよく思っていないくて偉そうな感じの人物に設定した。主人公は、喜作をあまりよく思っていないから、喜作に「えびフライって、何せ。」と聞かれても、何も答えずに、「なんでもねっす」とだけ言って、通り過ぎた。

金森さん

主人公は谷川のよどみでビールを冷やしていることから、冷えたビールを飲んでほしいと思っている。喜作が登場したときの喜作の態度から、仲が悪いことが分かる。主人公は自慢したかったが、父親が仕事してがんばって買ったえびフライを教えるのは良くないという思いと教えて食べられたくない気持ちから、「なんでもねっす」と通り過ぎた。

作者は仲の悪い喜作との会話でえびフライのことを大切にしている主人公を描くために、会話をする場面を設定した。

山本君

作者は、あえて一つ年上で偉そうな喜作という人物を登場させた。そうすることで、主人公が年上の喜作にさえもえびフライのことを知られたくない、それくらいにえびフライのことを大切に思っていることが読者に伝わるように設定した。

柴田さん

作者は、主人公が憎らしく思う喜作をあえて登場させることで、主人公のえびフライに対する思いを読者の人々に伝えたいという思いがあったから、このような場面を設定した。

白木さん

作者は、主人公が父親からもらったえびフライについて、どのくらい大切なものかなどを伝えるために喜作を登場させ、仲が悪いように設定した。主人公はえびフライについて教えないことから、自分や家族だけの秘密にしたかったと思う。

田口君

作者は、主人公が家族への思いから父親が帰ってきたえびフライをどれだけ大切に思い、同時に自慢したい気持ちがあることを表現するために、喜作を四場面で登場させた。そして、主人公がえびフライを自慢したい気持ちよりも、大切に思っていることが分かるように、喜作と情報を共有しない主人公を描いた。そして、一つ学年が上にある喜作に対しても、恐れずに、言うまいとする主人公のえびフライと父親への思いを表現するために、喜作を一級上に設定した。

永田君

作者は、普段なかなか自分の本心を表に出さない主人公だから、この場面で喜作を登場させることによって、一級上の喜作に対する「負けたくない」などと思う気持ちを使い、えびフライのことをどれだけ大切に思っているのかという、主人公の本心を描けるように設定した。

古澤さん